『東遊記』補遺　　橘南谿 著

空穂舟

越後に在りし頃、倉若三郎左衛門といふ人に親しく交りし。其人の物語に、去年の夏の事なりしが、**当国今町（今の直江津）の海浜にウツホ舟流れ寄れり。白木の箱作りの舟なり。怪敷舟と海辺の者打寄て中を見るに、年の頃十六七才斗と見ゆる女子壱人内にあり。**瓶に**水**を入れ傍に**菓子**一箱を入置り。誰人のいづれの所より流せしといふ事を知らず。いかなる人と尋しに、女子答へて、「流れしより是までに四度まで磯に付しかど、つき流して引上くれし人なし。何卒此所にあげくれよ。身の上も語らん」といひしかど、海辺の田舎、人情なく、又いかなるわけといふ事をも知らず、且は後日の難儀を恐れて手早く其まゝつき流しやりて、皆々跡をも見ず迯帰れりと云。倉若も此事を聞て不便の事におもひ人して其流れ寄りし海辺尋ねめぐりせしかど、いづちへ吹流し行けん、跡かたもなかりし、いと残り多き事なりきと語れり。

余りにあやしく昔語りのやうなりといひしかば、北海辺には折節はかゝる事あり。**此六年以前にもウツホ舟流れ寄りし事あり。**是も作りかたは同じやうにて**黒塗の箱作り**なりき。此時は見付し人、浜に上て箱を開くに、内に大なる入道の男入居れり。此入道、船より出て、東西はいかがぞと尋ねて、教しかば、東に向ひて去れり。其子細をいわざりしかば何国の人にて何ゆへといふ事を知らず。其頃そのあたりにて只あやしき事とのみいひつるまで也。

是等の事、越後など極辺鄙ゆへかゝる古風なる事も今に有ける事にや、いといぶかし。